史林
第十一卷 第三號
大正十五年七月一日發行
（通卷第四十三號）

研究

アメリカ發見前後の地圖地球儀とジパング（上）

文學博士 石橋五郎

コロンブスのアメリカ發見以後如何に影響を受けたかに就いて、予はアメリカ發見前後に成つた地圖地球儀に據り、其の變遷を考へて見やうと思ふ。

一

コロンブス西航の目標たるジパング（Zipangu）が、我が日本にあらずとする論者もあるが、之が當時傳聞せられた日本であることは疑なかるべく又、ジパングなる名稱は、マルコポロの紀行に基くことも亦殆んど明かである。然しそのジパングの所在を歐羅巴人は何處なりと考へしか、又之が

ジパングの位置に就ては、テレキの「日本島地圖學史圖帖」(Paul Graf Teleki, Atlas der Geschichte der Kartographie der japanischen Inseln 1909) にも

記されて居るが、テレキにはアメリカ發見時代前後の地圖と地球儀が轉寫せられたもの少く、又概ね省略した描寫であるから、本問題を取扱ふに當り、予が專ら根據としたものは左の資料である。

一、ノルデンショルド「複寫古地圖帖」(A.E. Nordenskiold Facsimile Atlas 1889)

二、ヴイヴイアン、ド、サルマルタン「地理學史附圖」Vivian de Saint-Martin, (Atlas dressé Pour L'Histoire de la Géographie 1874)

三、ラヴエンスタイン「マルチンベハイム　地球儀複寫圖」(Z.G. Ravenstein, Martin Behaim 1908)

四、レレウエル「近世の地理學」(F. Lelewel, Geographie du moyen Age 1852).

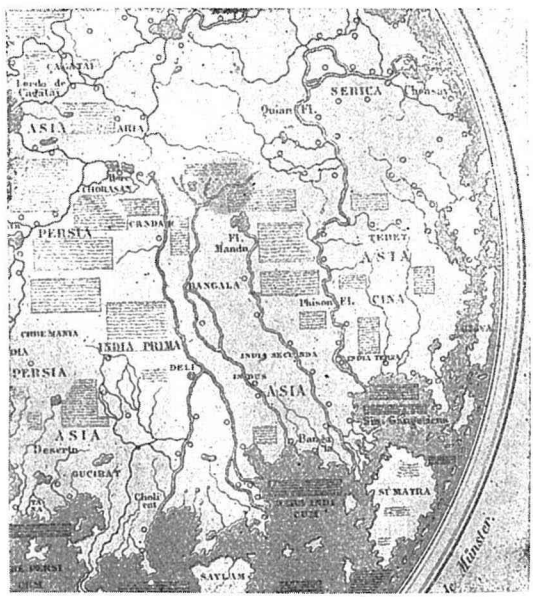
五、余が外遊中に得たる古地圖の複寫及古版トレミー地理書。

以下挿入の諸圖版も亦此等の資料よりの轉寫である。

註(1)　George Colingridge, the Early Cartography of Japan (The Geographical Journal 1894. May)

二　アメリカ發見前に於ける歐洲の地圖界は、未だ中世暗黑時代の影響より脫却せず　一般に幼稚にして、トレミーの地理學が漸く歐洲に復活したのは、第十四世紀の終であるから、第十五世紀の央

第一圖

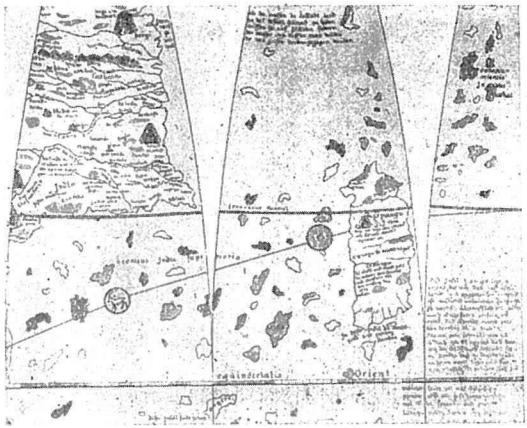


頃迄に、歐洲に行はれたる世界圖(Mappe monde)はサヌド(Sanudo 1320)、ラヌルフス(Ranulphus 1360)、フラマウロ(Fra Mauro 1457)等であるが、此等の圖は皆一全圖中に世界を縮めたもので、其の不精確なるは當然である。殊に此等の圖中に於て東洋は圖周の一部に極めて壓縮して示されて居るから、此等の圖中に於て、ジパングの名を求むることは困難であるし、又、その位置を考へることも結局徒勞であらう。右の内、フラマウロの地圖は往々ジパング論者の問題となつたもので、ジパングを日本にあらずとする論者コリングリッヂ氏は、此のフラマウロの世界圖(圖版第一參照)中に、在るギアヴア(Giava)をジパングに當て、之を以て日本に非ずと論じて居る。又テレキ氏は、矢張り此の圖中に在るZiripagi(挿入の圖版中には表れて居ない)を以て日本なりとし、フラマウロを、ジパングの名の表はれたる第一の世界圖なりと言つて居るが、この兩説は何れも位置の圖示が不完全なる世界地圖の上に立脚した論であるし、又其の名稱がジパングとは各稍々異るから、結局何れも水掛論であらう。尤もフラマウロの地圖は直徑六尺に餘り其の描寫に三年を要したと言ふから、其の精細なことが想像せられる。若し今ヴェニスに保存せらるゝ原圖を親しく見る事が出來れば、或は啓發する處があるかも知れぬ。(1)

要するに第十五世紀の央迄の世界圖には明確にジパングの名を記入せるものはないが、一四七四年に至り、トスカネリー(Toscanelli)の作つた世界圖には、初めてジパングの名があつたやうである。然しその圖は今傳つて居らぬ。唯トスカネリーの遺した手翰によつて、之を推定するのである。サンマルタンには、このトスカネリー書翰より還元して作つた圖が載つて居て、之にはCipanguと記されて居る。地圖學史の上より言へば、ジパング

の名が正しく世界圖に現れた初めは、トスカネリーと斷じても誤はあるまい。然し、現在の古圖中初めてジパングの名の表はれて居るのは前出のマルチンベハイムの地球儀である。之にはジパングは矢張りCipanguと記されて居る。（圖版第二參照）ベハイムの地球儀は一四九二年にニュルベルグで作られたものであつて、直徑五〇七粍大の地球儀で今尙同市の博物館に保管されて居る。

第二圖



抑々歐洲に於ける地球儀の起原は、紀元前第二世紀に在り。クラテス(Krates)によつて、既に作られたのであるが、其の後中世に至り、地球儀は全く其の跡を絕ち、アラビヤの地理學者も天球儀は作つたやうであるが、地球儀は作らなかつた。然るに第十五世紀に至り一方には、地理學の進歩に伴ひ、地球々體說の復活と、他方には葡萄人等の航海の結果により、地球儀上に、世界を描寫せんとする考が出て、地球儀は再び世に現れしものと思ふ。(2)

多くの地理學史家は、近世に於ける地球儀の復活をベハイムに始ると說けども、ベハイムの如き大地球儀が卒然として、世に出づる筈なく、恐らくは其の以前第十五世紀の央頃迄に、既に小地球儀は存在せしものと察せらる。一八六〇年佛蘭西のラオン(Laon)にて發見せられたる直徑一七〇粍の小地球儀は、其製作の年次、ベハイムの地球儀

と稍同じくすと考へらるゝが、之は元天文時計の一部に附屬せるものにして、此の種の小地球儀は恐くは既に早く製作せられたるものと思ふ。一九一二年予が外遊中、當時の聖ピータスブルグの皇立圖書館に於て見たる小型の古地球儀も亦恐くは同種のものであらう。

一四七四年のトスカネリーの書翰中には地球儀に言及し、コロンブスも其の航海に其の弟バルソウミユウの作りし地球儀を携帶したりと言へば、[3] 第十五世紀央以後、地球儀は決して珍しきものではなかつたと信ずる。然し現存の最古の地球儀としては、此のベハイムのと、ラオンのとの二種である。

兎に角此の二地球儀は、第十五世紀末に於ける世界的知識を徴する貴重なる遺物であるが、此の兩者には共に、ジパングが明に記されて居る。尤も其の名稱がベハイムにはジパング (Cipangu) となり、ラオンにはジンパングリ(Zimpangri)とあるが、此の二つの綴方は稍異るも多くは音の變化、若くは誤記と見ることが出來る。又此の二語の頭文字のCとZとは第八世紀以來獨逸に於ては同樣に使用せられて居るから直ちに解釋が出來るし、[4] 語尾のgu gri gとは恐くは誤記であらう。唯ラオンにあるZimpangriのPの前にmあることが、著しくベハイムのと異るが歐洲の語法に於て[5]この種の類例は多々あるから、こゝにも變化せしものと思はる。

而して、今この二地球儀、殊にベハイムのフアクシミレを基礎として、ジパングの東西に於けるの位置を見るに、ジパングは支那ザイツム(泉州)の東、經度數約二十度より三十度の間に在り、ジパングの東端は歐洲の西端と經度數約九十度の間を隔てる。而してジパングの南北の位置は、其の南端を北緯約七度の邊に置き、北端は同約三〇度の

邊まで及び北回歸線が其の北端を貫いて居る。即ちベハイムのジパングの位置を今の地球儀上に當てる時は、宛もキユーバ島の西に於て縱に位することゝなる。この考はコロンブスの西航の所信なりしと共に、新大陸發見以後と雖も永く歐洲人の頭を支配し、コロンブス自身も亦死に至る迄その考に捉はれて居たのである。

註(1) John Keane, The Evolution of Geography. 1899 p. 91
(2) Matteo Fiorini. (Geographische Zeitschrift, 1896 April)
(3) Ravenstein, Martin Behaim
(4) F. Diez, Grammatik der Romanischen Sprache
(5) 文學士田中秀央氏所說

三

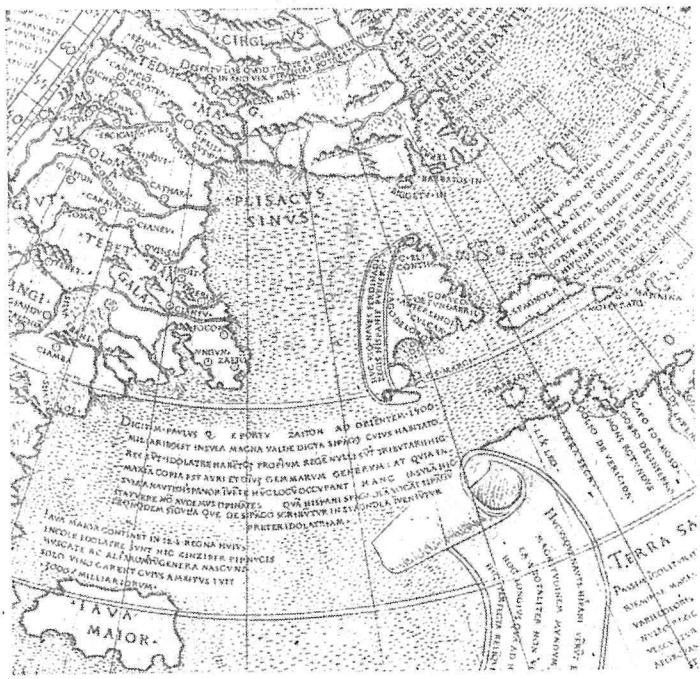
アメリカ發見直後一五〇〇年に成りし世界圖としては、コサ(Ivan de la Cosa)によりて作られたる航海圖がある。コサはコロンブスの第二航海に同乘せし航海者であるから、當時迄發見せられたる新陸地は夫々記入せられてあるが、未知の大陸は想像により描寫したる爲、過大に描き然もジパングは何等記してない。(1) 續いて、第十六世紀の初頭一五〇八年、新大陸發見後初めて印刷せられたるルイシユの世界圖(Ruysch, Universalior Cogniti Orbis Tabula)にも同樣、ジパングを脫して居る。(圖版第三參照) ルイシユによれば、新發見のスパニオラ(Spagnola)島其の他の島と、其の西に新陸地(Terra Nova)とを記入し、之が直ちに、亞細亞大陸のゴク、マゴツク(Gog Magog)に接し、其の間にあるべきジパングは亦描かれてない。此の新發見の陸地が亞細亞大陸と接することは第十七世紀頃迄一部の歐洲人の考へであつた。

ルイシユの世界圖に續いて世に出たものに、レノツクスの地球儀(Lenox Globe)がある。これは前のラオンの地球儀と同じく極めて小さいものであつて直徑僅かに一二七粍に過ぎないが、製作の年代は一五〇七年乃至一五一一年と考へられる。

これには再びジバングはジバングリー（Zipangri）となつて現はれ、その位置はイサベラ（Isabel）及スパニオラ（Spagnolla）二島の西に位し、南米大陸の一部なるテラ、ド、ブラジル（Terra de Brazil）に接し、緯度は北緯二〇度と三〇度の間を占めて居る。然しジバングの地形がベハイムのと異り不規則な四邊形として現はれて居る。此の類の形は次に出たるシルバヌスの地圖と稍類似する。

シルバヌス（Bernardi Sylvani）の地圖は一五一一年に出たもので、アメリカ發見後の第二の印刷せられた世界圖である、之れは改訂せられたトレミー地圖の新刊で心臓形圖法（homeoter projection）を用ひて居る。之れには新陸地をテラクバ（Terra Cuba）及イスパニヤ島（Ispania Ins）等の名にて示され、その西に接してザムバク島（Zampagu Ins）の名が見えて居る。而してこのザムバグ島がジバングに當る

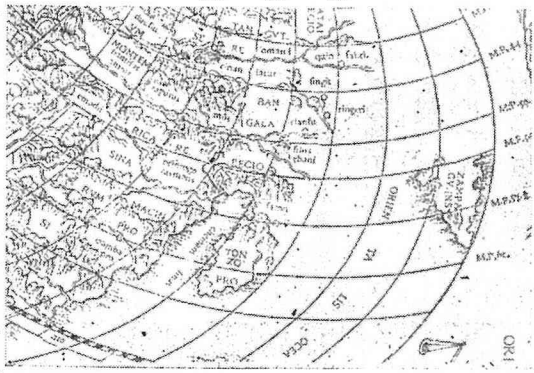
第三圖



ことは疑もないが、その位置並に形がベハイムに

比べると著しく異つて居る。即ちその形は南の方を頂點とした屈曲ある三角形として表はされ、位置としては北緯三〇度線が三角形の底邊近く貫き

第四圖



從前よりは位置が北に進んで居る。而して、東西は新發見地のテラクバと緯度約四十度の距りがあつて西の方支那との關係は經度約二十度の東海（Orientalis Oceanus）を隔てゝ相對せしめてあるが、支那の東海岸は不明のまゝに殘されてある。（圖版第四參照）

このシルバヌスに次では、翌一五一二年に刊行せられたストブニクザア（Joannes de Stobnicza）の圖がある、木版を以て印刷せられた極めて、粗雜なる世界圖であるが、新大陸とジバングとの關係は前諸圖より稍異つて居る。即ち本圖に於ては既に南北米の新陸地が地峽によりて結びつけられジバングは新大陸の西の境からして經度約十度を距つた所に位し、支那との

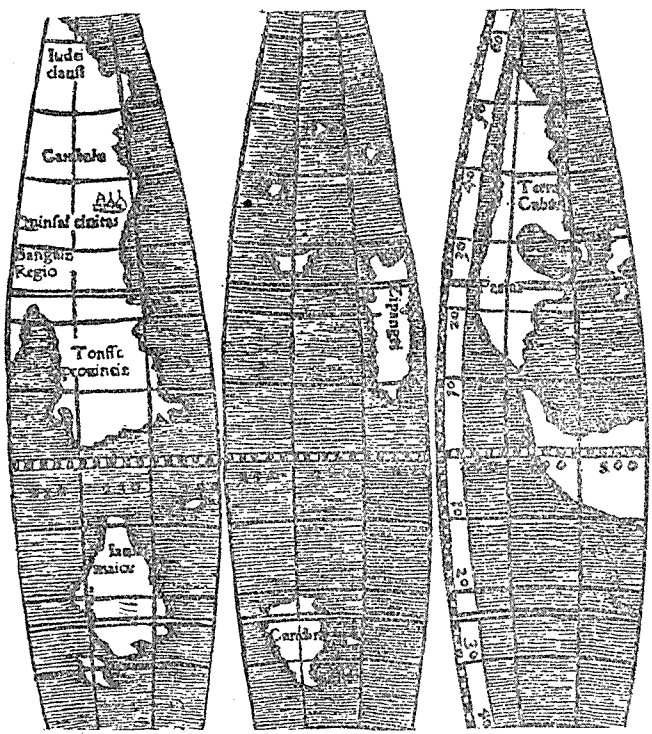
第五圖

間隔は約二十度である。而してその南北の位置並に形に至つては、再び十五世紀の圖に歸りベハイムのそれと全く變りはない。（圖版第五參照）

このジパングの位置を新大陸の西側に接近して居る地圖は一五〇七年のワルドゼーミューラーの地圖及一五一四年のブーレンゲル(L. Boulenger)の世界圖、又これと極めて類似する予が曾て、レニングラードの皇立圖書館に於て見た一五一七年の世界圖と傳へらるゝものにも同樣である。(ファクシミレー圖版第六參照)

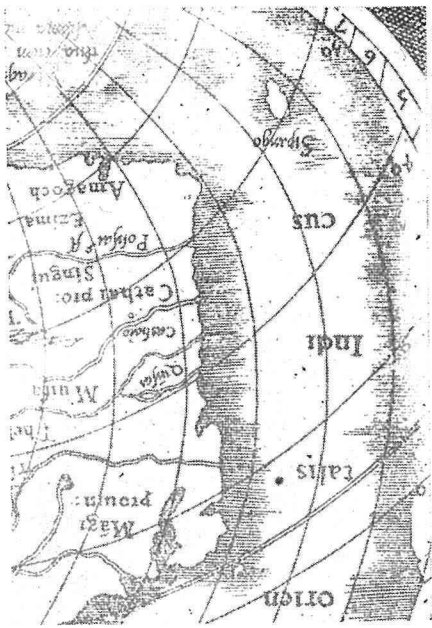
而してブーレンゲル及最後の地圖は共に楔狀世界圖(Map in gores)であるがジパングの東西の位置は從來の圖と著しく異り、歐洲の西岸から、經度數約一百度の地點を占め、アジア大陸とは比較的遠く、經度約三十度の距りを有して居るこの點は一五二〇年に現はれたアピアヌス(Apianus)の地圖にも同樣であつて之より一五三二年のグリネウスの世界圖(Gryneus Novus orbis)にも大なる變化は認められない。

第六圖



然るに一五三八年にメルカトール（Gerardus Mercator）が複心臓形地圖（Double Cordiform Map）を作つて、南北兩半球を別々に描寫し、地圖學上に

第七圖



一進歩を來すやに在りジパングの位置地形は大いに變化した。即ち、この圖に在りてはジパングはジパンゴー（Sipango）と現はれ、その位置は、北緯約五〇度支那Cathayを距ること緯度數約十度を示し、歐洲との距離はブーレンゲルよりも更に約十度遠かつて居る。而して其の形は非常に小さく僅かに存在を認めらるゝ位である。（圖版第七參照）

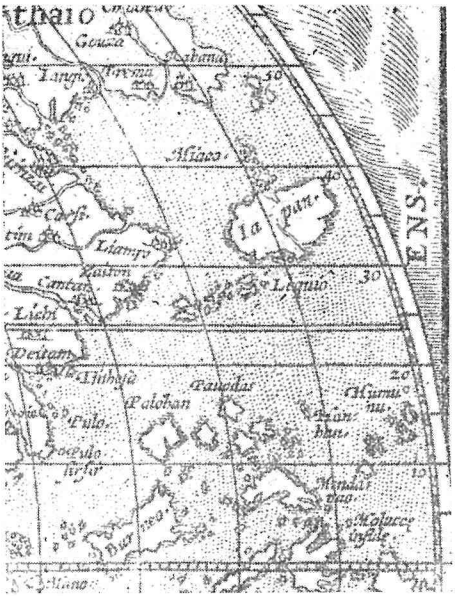
その後歐洲にてはトレミーの地圖が屢々更正せられて世に現はれるもの相踵き、ジパングの位置が時としては再びベハイムのそれと相等しきものもあり。又中には全く之を載せざるものもあつたが、一五七〇年に至り漸くジパングは我が現在の位置と相似たものとなつて來た。即ち同年に成りしオルテリウスの世界圖（Ortelius, The atrium orbis Terrarum）にはジパングをイヤパン（Iapan）とし、西南より東北に稍長き島となり表はれ、其南北の位置は北緯約三〇度乃至四〇度の間に横り、支那と相距ること經度約五六度に過ぎないが、歐洲西岸とは著しく隔つて居る。（圖版第八參照）

註（1）Keane, the Evolution of Geography に其の複寫圖が載つて居る。

四

以上擧げ來りし所につきて、アメリカ發見前後の地圖、地球儀上に於て、ジパング描寫の變遷を

第八圖



その影を沒したけれども、再び一五一〇年前後に現はれ來り、其の後に成れるトレミーの地圖にはジパングを缺くものもあるが、一般には世界圖上ジパングの影を絕たなかつた。

(二)アメリカ發見直前直後に於ては、ジパングは略北回歸線の下に位し第十五世紀の初めにその位置が稍北に移つたけれども、幾何もなく再び南に下つて熱帶圈内に入り、一五三〇年代の末には著しく北方に偏し、又々更に再び逆轉して南に下り、赤道に接近したが、ついに一五七〇年代に至り殆んど現代の位置を占むる迄になつた。

(三)、東西に對する位置もこの間に於て幾度の變遷を見た。

今ジパングの位置を歐洲の西岸を中心として考ふる時は、アメリカ發見當時にては經度數約九十度を距てゝ居たのが、一五一四年のブーレンゲルの地圖では約一百度を距て、一五三八年のメルカ

總括すれば如の左くなる。

(一)ジパング及びそれに類似の名稱の初めて現はれたのは、第十五世紀の央頃迄である。而してアメリカ發見の後第十六世紀の初めに於て、一時

トールの圖では經度約百十度の距りとなり、漸次その數を增して、一五七〇年オルテリウスに至りて經度約二百度を距つることゝなり、現在の隔り約二百二十度とほとんど一致して來た。

（五）かく位置については可成り、變遷の跡が見られるが、地形については、僅かに第十六世紀の初頭のレノックス地球儀及びシルバヌスの地圖と一五三八年のメルカトールの圖とを除いては第十六世紀の中葉迄殆どベハイムのジバングの形を脫する事が出來ず、漸くその後年に至り現在の形に稍接近して來た。

ジバングの位置地形が、アメリカ發見前後の地圖及地球儀上に、此の如き變遷を來したことについては、如何なる事情と原因とに基くものであるだらうか、それについての解釋私考を次に述べようと思ふ。

平安朝時代に於ける莊園の組織（上）

文學士　川上多助

一、莊園の管理

大化改新によつて打破せられた土地兼併の弊は奈良朝から平安朝に至りて再び盛となり、皇族及び有力なる朝臣、寺社は各地方に於て多くの莊園を所有するやうになつたが、これ等の莊園の事務を管理する爲めに諸種の職員が置かれてあつた。其名稱は各莊園を通じて必ずしも一定するものでないが、奈良朝時代の莊園に就いては、莊領、莊